

## 教員養成課程4年生を対象とした進路決定プロセスの検討

梅田 恭子\* 岡室 敢太\*\*

\* 情報教育講座

\*\* 卒業生

### An Examination of Career Decision Process for 4th Grade Students in Teacher Training Course

Kyoko UMEDA\* and Kanta OKAMURO\*\*

\*Department of Information Science, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Graduate, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### I. はじめに

教員養成課程の学生は、いつ・なぜ教職を志望し、教職に就くのか、また一方で、いつ・なぜ教職以外の道を選択したのだろうか。本研究は、教員養成課程に入学した学生は、一度は教職を志望したのではないかという仮説のもと、この問いの一端を明らかにするために、教職を志した理由や、志望した時期、他の職業への検討などの視点から、探索的に調査を行い、検討するものである。もって教員養成課程の学生の進路指導に寄与することを期待する。

#### 1. 先行研究

河崎（2002）は、大学生が職業に就くまでのプロセスに関してインタビュー調査を行い、キャリア決定プロセスを次の4つの型に分類した。

- ・早期決定型：小・中学校段階で特定の職業イメージを内在化し、周囲の意見や就労的経験で強化されながら、顕著な葛藤経験がないまま職業を決定していく型
- ・途中変更型：小・中学校段階で内在化された職業イメージを、成績による進学先の調整・両親などの周囲の反対・就労的経験や突発的な状況変化によって、大きな葛藤を伴って変更する型
- ・直前決定型：中・高等学校時代に実現可能な職業イメージを構築できず、大学進学後も職業イメージが拡散したまま、就職活動期に初めて葛藤経験を伴って決定を行う型
- ・回避型：職業イメージが拡散したまま、就職活動期になっても活動をせず、決定を回避する型

これに対して、本多・落合（2004）は、河崎の4類型の説明を、医療系の大学進学時の進路決定プロセス

に合うように修正し、出会い型を含めた5類型で説明できるかを確認した。その後、落合ら（2006）は、医療系大学の学部1年生に、職業に関するイメージが明確か、自分の決定に納得しているか、決定の時期の3つが含まれるように説明した5類型を提示し調査を行った。それらを以下に示す。

- ・早期決定型：小学校頃から漠然と自分の属している医療職（看護学科なら看護師）を考え、その職業に就いている自分をイメージし、しかも周囲も勧めたので、意思が強まり、ほぼ希望通りの進学をし、進路には納得している。{職業イメージは明確、決定に納得、決定時期は小学生（中学生）}
- ・出会い型：漠然と病院で働きたいとか医療職に就きたいと考えていたが、高校生（中学生）時代に、祖父母や自分の病院通院や大学案内を見るなど何らかのきっかけで今の職業があることを知り、これが自分が考えていた職業だったのだと納得し、それ以来その進路に進もうと決めている。{職業イメージは明確、決定に納得、決定時期は高校生（中学生）}
- ・途中変更型：小学生頃からなりたいと決めていた職業（医療職とは限らない）があったが、中学・高校になって、成績による進学先の調整、両親などの周囲の反対等があり、大きな葛藤があって進学先を現在在学している学科に変更したが、変更前の職業への思いが残っている。{職業イメージは明確、決定に納得していない、決定時期は高校生（中学生）}
- ・直前決定型：大学入試の受験手続き直前までどんな職業に就くかがはっきりせず、直前になって大きな葛藤を伴って決定したが、自分の決定に関しては納得して受け入れている。{職業イメージは不明確、決定に納得、決定時期は高校生（中学生）}
- ・回避型：いつまでもどのような進路に進むかがはっ

きりしないまま、そのときあった話に乗って合格してしまいましたが、将来就くであろう医療職の職業に対するイメージははっきりせず、自分の決定だという納得もできていない。〔職業イメージは不明確、決定に納得していない、決定時期は高校生（中学生）〕この調査の結果、「出会い型」が44.9%と最も多く、次いで「早期決定型」が23.4%と続いた。

さらに、松井・柴田（2008）は、本多・落合（2006）が作成した医療系大学進学時の進路決定プロセスの分類を基に、教師用に表現を修正した類型を作成した。これを用いて教員を対象に調査を行い、構成比率を明らかにしている。松井・柴田（2008）が作成した類型は以下の通りである。

- ・早期決定型：子どもの頃から教職に憧れ、特に他の職業のことも考えず、当初のほぼ希望通りに教職に就いた。
- ・途中変更型：なりたいと思っていた職業があったが、成績の問題や周囲の反対等があったので、迷ったり悩んだりした。その結果、その職業ではなく現在の教職に就いた。
- ・直前決定型：いくつか就きたい職業があり、教師もそのうちの1つだったが、最終的には自分の意志で選択し、教職に就いた。
- ・なりゆき型：どの職業に就きたいのか自分自身の希望が不明確なまま、なりゆきで教員採用試験を受験したら合格したので、教職に就いた。
- ・転職型：学校卒業後、別の職業に就いていたが、転職し、教職に就いた。

その結果、新潟県内に勤務する教員443名を対象とした調査の中では、「直前決定型」51.2%の次に「早期決定型」23.6%の割合が高く、教員は比較的早い段階から教職に就くことを想定して進学してきている人が多いことが明らかになっている。

しかし、この研究は、既に教員就職をした人を対象

としており、選択しなかった人は含まれていない。また、先に類型を示しているため、細かな要因等がわからない部分もある。

## 2. 本研究の目的

そこで、本研究では、冒頭の問いを明らかにするために、教員養成課程の4年生を対象に、これまで志望した職業とそのきっかけや理由、それを諦めた理由を探索的に調査し、卒業後に、教職に就く予定の人と、それ以外の職業を選択した人の進路決定プロセスに何か特徴はあるのかを検討することを目的とする。

## II. 研究の方法

### 1. 調査方法の概要

#### (1) 対象者

卒業後の進路がほぼ確定している愛知教育大学教員養成課程の4年生43名。

本研究の意図や内容を説明し、研究へ協力の同意を得た対象者のうち、本研究の間を明らかにするために、教職に就く予定者（以後、教員就職群）とそれ以外の職に就く予定者（以後、その他就職群）がおおよそ半数になるように依頼した。その結果、前者が23名（2名の教職大学院進学者を含む）、後者が20名となった。なお、その後の追跡調査はしていないため、その時点での自己申告に基づいたものとなる。

#### (2) 日時

2020年9月下旬～12月中旬

#### (3) 方法

まず、調査対象者が、30分～1時間で、ワークシート（図1）を作成した。

ワークシートには小学生から大学4年生までに時系列に、志望した職業等を記入してもらった。記入項目は以下の通りである。



図1 本調査で使用したワークシートとその記入例

・志望した職業

小学1年生から現在までに志望した職業（や夢）の移り変わりを書く。四角でその時点でなりたかった職業を書き、どれくらいまで目指していたのかを矢印で書く。同じ時期に志望する職業を複数持っている場合は、その個数分記入してもらった。

・その職業を目指したきっかけ、理由

上記で書いた職業を目指したきっかけ、理由を書く。もし、目指した経緯でエピソードなどがある場合は、それも記入してもらった。

・その職業を志望しなくなった理由やきっかけ

上記で書いた職業の矢印の最終地点に、その職業を志望することをやめた理由を記入してもらった。

なお、上記以外についても記述したいことがあれば、自由に記入してもらった。

その後、ワークシートを見て、気になったところ、さらに深く知りたいことをオンライン会議システムやメール等を用いて質問し、追加事項があれば追記してもらった。

2. 分析の方法

調査の結果を、先行研究等を参考にし、以下のAからHの観点で分析を試みた。また、それぞれについて、教員就職群とその他就職群で特徴があるかどうかにも検討した。

A-1：教職を目指したきっかけや理由

教員養成課程に入学した学生は、一度は教職を志望したのではないかという仮説を前提とし、全員を対象に、最初に教職を志望した動機を分析した。

A-2：教職から変更したきっかけや理由

その他就職群の対象者に対して、なぜ教職以外の職を選択したのかの動機を分析した。

B：教職を目指し始めた時期

教職を目指し始めた時期が、小学校、中学校、高等学校のいずれかで分類した。

C：志望した職業数

ワークシートに記入された、今までにやりたいと思った職業の数を洗い出した。なお、人によっては、幼稚園の頃、戦隊もののヒーローになりたかった等の夢を記入してくれた人もいたが、職業として数えられるものをカウントした。

D：職業イメージの明確さ

調査時点でほぼ確定している職業に対するイメージの明確さを、ワークシートの記入から読み取れるかどうかを検討し、明確にあるかないかの2択で分類した。

E：職業決定の納得感

ほぼ確定している職業選択に対する納得感を、ワークシートの記入から読み取れるかどうかを検討し、明確にあるかないかの2択で分類した。

F-1：職業選択への葛藤

ほぼ確定している職業を選択することに対して明確な葛藤がワークシートから読み取れるかどうかを検討し、明確にあるかないかの2択で分類した。

F-2：教職の校種や教科の選択に対する葛藤

なお、教員就職群については、教員という職業選択だけではなく、校種や教科選択に対する明確な葛藤がみられたため、それについても2択で分類した。

G：教育実習等の影響

同期や理由に教育実習に対する記述が半数弱で見られたため、実習がポジティブかネガティブのどちらの影響を与えたか、記述がない、の3択で分類した。

H：進路プロセスの類型化

1章1節の先行研究の類型化を参考に、探索的に分類した。

Ⅲ. 結果

1. 教職を目指したきっかけや理由

教職を目指したきっかけや理由については、複数の回答が読み取れた。2名以上の回答があったものを、群別に分類した結果を表1に示す。「特定の教員へのあこがれ」から目指した人がどちらの群においても第1位であった。次いで、友達や子供たちなどに「勉強を教えるのが好き」という理由が続いた。親や兄弟姉妹等が教員であるなど「身近な人の影響」を挙げる人も複数いた。

表1 教職を目指した理由やきっかけ（人）

きっかけや理由（複数回答）	教員就職群		その他就職群	
特定の教員への憧れ	12	52.2%	7	35.0%
勉強を人に教えるのが好き	7	30.4%	7	15.0%
身近な人の影響	7	30.4%	3	35.0%
ある特定の教科が得意	6	26.1%	3	15.0%
身近な人からの推薦	1	4.3%	2	10.0%
安定の職業	0	0.0%	2	10.0%

その他就職群の20名が、教職以外を選択した理由を表2に示す。6名が大学での授業や実習を通して教員という職業が「自分が想像していたものと違った」ことを理由に挙げている。5名は「教育実習等で自信を失った」ことを挙げており、これは、高山・小西(2020)の研究でも実習を通して教職へ就くことへの不安が見られる場合があることがわかっている。なお、本研究の仮説に反して、「そもそも教職を目指していない」という回答も4名あった。この4名は、教員養成大学に入学した理由を、国立大学であるからとしている。



表2 その他就職群の教職以外を選択した理由

教職以外を選択肢した理由(N=20)	人数	割合
想像していたものと違った	6	30.0%
教育実習等で自信を失った	5	25.0%
もともと教師を目指していない	4	20.0%
もともと別の職業とも迷っていた	2	10.0%
その他	3	15.0%

2. 教職を目指した時期

教職を最初を目指した時期を群ごとに小学生、中学生、高校生で分類した結果を表3に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、両群の人数比率の差は有意傾向であった ( $\chi^2(2) = 5.76, p < .05$ )。残差分析の結果、高校生で初めて志望した人が教員就職群で有意に少なく、その他就職群では有意に多かった。

表3 教職を目指し始めた時期 (人)

目指した時期	小学生	中学生	高校生
教員就職群	10	8	5
その他就職群*	3	4	9

\*その他就職群の浪人中に志望した1名は高校生に含む。また、4名は一度も志望したことはない。

3. 志望した職業数

小学生から現在までの職業数を見ると、最小が1、最大が6であった。その結果を3個以内とそれ以上に分けて群別に示したのが表4である。 $\chi^2$ 検定を行ったところ人数の偏りが有意であった ( $\chi^2(1) = 14.70, p < .01$ )。残差分析の結果、教員就職群では職業数1~3が、その他就職群では職業数4~6が有意に多かった。つまり、教員就職群の方が、その他就職群より志望した職業数が少ない人が多いといえる。

表4 志望した職業数 (人)

志望した職業数	1~3	4~6
教員就職群	18	5
その他就職群	3	17

4. 就職予定の職業イメージの明確さ・職業決定の納得感・職業選択への葛藤

就職する予定の職業イメージ、職業決定の納得感、職業選択への葛藤が明確に読み取れるかどうかで分類したものが表5である。

$\chi^2$ 検定を行ったところ、イメージの明確さと決定への納得感については、人数の偏りが有意であった ( $\chi^2(1) = 8.24, p < .01, \chi^2(1) = 5.29, p < .05$ )。残差分析の結果、いずれも教員就職群の有と、それ以外就職群の無が多いことから、教員就職群の方が、職業への明確なイメージや就職に対する納得感を持っている人が多いことがわかる。

職業選択への葛藤は群の人数の偏りは見られなかった。なお、教員就職群23名のうち15名(65.2%)が校種や教科の選択に対する葛藤を記述していた。

なお、これらの項目間の関係を見るために相関係数を計算した。その結果、職業イメージの明確さと職業決定の納得感の間に、有意な正の相関が見られた ( $r = 0.54, F = 16.52, p < .01$ )。相関の強さは中程度以上といえる。

表5 就職予定の職業イメージ・納得感・選択への葛藤の有無 (人)

	職業イメージ		納得感		選択への葛藤	
	有	無	有	無	有	無
教員就職群	18	5	13	10	11	12
その他就職群	6	14	10	10	14	6

5. 教育実習の影響

教育実習等の実習について言及している人が教員就職群で10名、その他就職群で7名いた。記述している人を対象に、実習が職業選択に対してポジティブな影響を与えたのか、ネガティブな影響を与えたかの人数を表6にまとめた。2x2の直接確率計算法によると、人数の偏りは有意であった ( $p = .000$ , 両側検定)。教員就職群の方が、実習がポジティブな影響を与えている人が多いことがわかる。

表6 実習の進路選択への影響 (人)

	ポジティブな影響	ネガティブな影響
教員就職群 (N=10)	9	1
その他就職群 (N=7)	0	7

6. 進路決定プロセスの類型化

先行研究に倣い、探索的に類型化を試みた。なお、大きな枠組みとしては、河崎(2002)の分類と同様に、早期決定型、途中変更型、直前決定型、回避型の4つにわけることができた。ただし、早期決定型と直前決定型の下位として、それぞれ2つと3つに分類することができた。その人数を表7に示す。各類型の意味は、以下の通りである。

- 早期決定型：小・中学校段階で教職に憧れがあり、周囲の意見や環境で強化されながら、教職に対する明確なイメージを持ち、当初のほぼ予定通り教職に就く。

- 一方、河崎(2002)の分類では、早期決定型には、顕著な葛藤がない、とあった。しかし、今回の調査では、教師の働き方への葛藤を高校でも大学でも持ち続けながら、最後は確固たる意志を持って決定した者や、特定の教科が好きという気持ちが強く、大学に入って教えるということに不安を抱くなど、葛藤をもち揺らぎながらも、最後はそれによってイメージを強く持って教職に就くことを選択した者もみられた。そのため、葛藤の有無によって二つに分けた。

- 途中変更型：中・高等学校時代から教職に就きたいと考え、成績による進学先の調整、両親などの周囲

表7 進路決定プロセスの分類とその人数

進路決定 プロセスの類型	早期決定型		途中変更型	直前決定型			回避型
	葛藤有	葛藤無		イメージ弱	イメージ強	早期教職志望	
教員就職群	5	9	2	2	3	2	0
その他就職群	0	0	2	5	3	3	7

の反対、実習体験などによって、葛藤を持ち、一度は教職ではない職業に就こうと考えたり迷ったりする時期がある。最終的には自分の意思で選択し、その職業に対する明確なイメージを持ち、その職業に就く。

- ・直前決定型：直前まで職業イメージが明確ではなく、就職を考える際に、葛藤経験を伴って決定を行う。教職との関りから考えると、次の3つに分類分けできた。
  - a. 中・高等学校時代に実現可能な職業イメージが拡散傾向にある。複数の就きたい職業があり、教職はその一つである。
  - b. 高校生時代に、周りの影響などから漠然と教職を目指す。大学で教育実習等の実習や人との出会いや葛藤を通して、職業イメージを持ち進路を決定する。
  - c. 小・中学校段階の比較的早い時期に一度は漠然と教師を目指す。高校まで明確なイメージはあまり持っていない。大学で教育実習等の実習や人との出会いや葛藤を通して葛藤を通して進路を決定する。

なお、一度も教職を目指していない者については、上記のaからcの「教職」の部分、就職予定の職に読み替えて分類した。4名中1名が該当した。

- ・回避型：直前までもしくは現在も、職業イメージが拡散している、もしくはどの職業に就きたいのか自分自身の希望があまり明確ではない状況で職業を選択する。

直前決定型aと回避型は、職業決定のタイミングや、職業イメージが明確ではない点については類似している。ただし、直前決定型aの方が納得感をもって職業を選択している傾向がある。回避型はまだ悩みを抱えていたり、生活のためにいったんその職に就くがいずれは違う職業に就きたいという気持ちを持っていたりという消極的な捉え方がうかがえ、職業決定に対する納得感が異なる。

大枠となる4つの類型でFisherの正確検定を行った結果、有意であった ( $p=0$ )。調整された各セルの残差について両側検定 ( $\alpha=0.05$ ) を行った結果、教員就職群において早期決定型の度数が有意に多く ( $z=4.25$ , adjusted  $p=0$ )、また回避型の度数が期待度数より有意に少なかった ( $z=-3.10$ , adjusted  $p=0.003$ )。その他就職群においては早期決定型の度数が有意に少なく ( $z=4.25$ , adjusted  $p=0$ )、また回避型の度数が有意に多かった ( $z=3.10$ , adjusted  $p=0.003$ )。

#### IV. 考察とまとめ

今回の調査では、教職に就く予定者のうち14名 (60.9%) が小・中学校段階の早期に教職を目指し、周囲の意見や環境で強化されながら、当初の志望通り教員になっている。また、職業に対するイメージは明確に持っている者が18名 (78.3%) と多い。直前に決定する者も7名 (30.4%) いるが、回避型は一人もいなかった。河崎 (2002) の研究でも早期決定型が教員志望者に多く見られたという結果が出ており同じ傾向が見られた。ただし、職業選択に対する葛藤を抱く割合は約半数おり、さらに校種や教科に関する葛藤を持つ者も15名 (65.2%) と多い。ある特定の教科が好きでそれを教えたいという理由から教職を目指す者もあり、校種や教科に関する悩みも進路の決定に影響を与えていると考えられる。

一方、教職以外の職業に就く予定者のうち11名 (55%) は、直前決定型であり、大学で就職予定の職業を決定している。また7名 (35%) が回避型に該当し、職業イメージや納得感が薄いまま進路を決定している場合がある。さらに、教職以外を選択した理由として、大学での生活や実習から「想像していたものと違った」や「教育実習等で自信を失った」が11名 (55%) を占め、また7名 (35%) が実習に対するネガティブな影響を記述している。このことから、職業イメージが拡散している、もしくは薄いまま教員養成課程に入学し、その後の経験や環境から葛藤し、進路を変え、就職を選択する傾向が読み取れる。ただし、中には実習で教員になることは諦めつつも、教える以外にも教育に携わる仕事がしたかったのでこの職にした、スキルアップしてから教職に就きたい、など教職との関わりをイメージして進路を変更する者もいる。

教員就職予定者も、他の就職をする予定者も、教職を目指したきっかけや理由は、特定の教員との出会いとその憧れや勉強を教えるのが好きという同じ理由からではあるが、教職を志した時期や、進路を決定したプロセスには異なる傾向がみられることが示唆された。

今後の課題としては、本研究は探索的に研究をしたため、特に就職予定の職業のイメージの明確さ、職業決定の納得感、職業選択への葛藤、類型化などは筆者らの主観的な判断に基づく分類結果となっている。判定する人数を増やす、質問紙による調査をとり入れるなど、より客観的な分析や調査が必要である。

## 謝 辞

本研究調査にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

## 付 記

この論文は、岡室敢太「2020年度 進路自己決定プロセスの検討～教員養成課程の学生に焦点をあてて～」での調査データをもとに、再分析・再検討したものである。

## 参考文献

- 本多陽子, 落合良行 (2004) 重要な決定にまつわる心理的特性からみた医療系大学生の進路決定プロセスの特徴, 筑波大学心理学研究, 28, 79-87
- 本多陽子, 落合幸子 (2006) 医療系大学生の進路決定プロセス尺度の試み－進路決定プロセス類型と職業的アイデンティティからの検討－, 茨城県立医療大学紀要, 11, 45-54
- 河崎智恵 (2002) アイデンティティを育てる教育, アイデンティティ生涯発達論の射程 (岡本祐子編著), ミネルヴァ書房, 京都, 241-259
- 松井賢二, 柴田雅子 (2008) 教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関連, 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 教育実践総合研究, 7, 141-159
- 落合幸子, 本多陽子, 落合良行, 藤井恭子, 塚本信宏, 大橋ゆかり, 野々村典子, 黒木淳子 (2006) 医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連, 医学教育, 37 (3), 141-149
- 高山智行, 小西和哉 (2020) 近畿大学工学部教職課程年報, 7, 3-14

(2021年9月24日受理)